現代アートと活力あるむらづくり

▼林野庁「森の巨人たち百選」に選ばれた「コブ杉」

秋田県 上小阿仁村（かみこあにむら）

安全・安心な村

上小阿仁村は、秋田県のほぼ中央に位置する南北に長い山あいの村です。太平山に源を発する小阿仁川が村の中央を流れ、途中、支流を合わせて米代川へと流れていきます。北部は平地で南部は山林が多く、総面積256・82㎢の92・7％が山林原野で占められており、うち75％が国有林となっています。かつては、林業が盛んで、天然秋田杉の産地として知られており、平成12年に「森の巨人たち百選」に選ばれたコブ杉や約720本の天然杉が立ち並ぶ「自然観察教育林」があります。小阿仁川沿いに20の集落が点在し、人口は2、600人余りで、高齢化率がおよそ45％と県内一の高さとなっています。農業が盛んで、村の特産物である食用ほおずきやズッキーニ、良質なあきたこまちなどが生産されています。

村内には鉄道はなく、村北部を斜めに走る国道285号のほか、県道214号、37号によるルートがあり、車でのアクセスとなります。

村全域に光ケーブル網を構築しており、高速通信によるインターネット環境を整備しています。また、光ケーブル網を活用し、村独自のネットワークによる村内通話料無料のテレビ電話がほぼ全戸に設置されています。テレビ電話機能のほか、画面を配信することができ、村のイベントや災害時の避難勧告などの行政情報の配信のほか、高齢者世帯や一人暮らし世帯への見守りサービスに活用されており、安全・安心の村づくりの一翼を担っています。全集落に設置している防災広報無線と連携させているため、無線による放送内容がテレビ電話でも流れ、タイムリーな行政情報が、一度にほぼ全戸へ発信される仕組みとなっています。

上小阿仁村村章

大地の芸術祭初の飛び地開催地

上小阿仁村の最奥地にある八木沢集落。国道285号から、県営第1号の萩形ダムへ向かう県道129号をおよそ9㎞進んだ8世帯16人が暮らすこの集落が平成24年夏、「第5回大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ2012　飛び地開催　KAMIKOANIプロジェクト秋田2012」として、7月29日から9月14日までの55日間、集落内や公民館、棚田に現代アート作品が展示され、大きな注目を浴びました。

「大地の芸術祭」は、元々、新潟県十日町市と津南町で3年に1度行われる、国内でも最大級の規模を誇る野外アートイベントであり、出展作家である、秋田公立美術大学の准教授の方とのつながりにより、平成24年夏、大地の芸術祭初の飛び地開催が上小阿仁村八木沢集落で開催されました。

▶今年度展示している作品

▶平成25年度行われた伝統芸能イベントで八木沢番楽を披露する中学生

会期前より、約160人が参加して行われた「清掃ワークショップ」や、「作品制作ワークショップ」、会期中に実施した各種イベントなど、多くの村内外の方々の協力のもと、事業が進められました。来場者の目標を5、000人としていましたが、およそ2倍となる、延べ9、114人の来場者が集落を訪れ、現代アートと八木沢集落のもつ里山の原風景との融合に共感しました。

地域の方々とのかかわり

初めての開催としては成功であったといえますが、今後の継続へ向けて、たくさんの課題が残りました。その中でも、地域の方々の関わりが非常に重要で、大きな課題であることに気づかされました。

前述のとおり、会期前に実施した、会場である八木沢集落の「清掃ワークショップ」には、村内外含め、約160人の方々が参加してくださったものの、村として初の取り組みとなるアートイベントに、地域の方々は「何かあるのか」「何をしているのか」という不安が大きかったはずです。八木沢集落の方々からも、説明会を実施し

◀会期前に行われた清掃ワークショップ（右　八木沢公民館　左　旧沖田面小学校）

◀秋田市の竿燈祭でパレードし「KAMI-KOANIプロジェクト秋田」をPR

▶作品制作ワークショップ（八木沢公民館）

ていても、これから起こる未知のイベントに対して「たくさんの人が来るはずがない」という声が上がりました。

また、集落には商店がなく、来場者のため、会期中の土・日・祝日に公民館でカフェを開くことを決定しました。このカフェの出店者についても村内業者・団体で手を挙げてくれるところがなく、村外の業者で対応し、村内の4つの婦人団体にその手伝いを兼ね、村の特産物や野菜などの販売を依頼しました。

会期が進むにつれ、連日のように地域の新聞で特集が組まれるようになると、来場者数も増え、イベント開催日には、終日の来場者が、およそ1、000人を数える日もありました。徐々に集落の方々や、地域の方々も事業に対して関わりを深め、活動を行っていただくことが増えてきました。

KAMI-KOANIプロジェクト秋田2013

平成25年は8月10日から10月14日までの66日間、「KAMI-KOANIプロジェクト秋田2013」として開催しました。作家数も増え、15人の作家が八木沢集落内や公民館、棚田に作品を展示しました。また、新たに、平成18年度に廃校となった旧沖田面小学校を会場に、作家が滞在して作品を制作する「アーティスト・イン・レジデンス」事業を展開。8月末まで5人の作家が村へ滞在し、作品の制作活動を行い、八木沢集落内や、旧沖田面小学校に展示しました。

会場である八木沢集落までは、村の中心部に位置する「道の駅かみこあに」から旧沖田面小学校を経由し、1日4往復する無料のシャトルバスを土・日・祝日に運行し、平成25年は、地域の方々の関わりを重要視し、様々な機会を見つけて事業のPRを行ったり、カフェ出店者の公募を行ったりしてきました。

しかしながら、まだまだ、課題は多く、地域の方々から様々な意見をいただくことが多々あります。今後も、地域の方々に事業に関わりを持っていただき、課題を一つひとつクリアしながら取り組んでいきたいと考えています。

▶滞在する作家3名によるトークショー（旧沖田面小学校）

活力あるむらづくりへ

この「KAMI-KOANIプロジェクト秋田」は取り組みを始めたばかりですが、秋田県で国民文化祭が行われる平成26年度までの継続実施が決定しています。現代アートや芸術の力を活用しながら都市と農村間、世代間の交流人口の増加を図り、自然を生かした活力あるむらづくりを目指してまいりたいと考えています。

上小阿仁村長　中田　吉穂

（平成25年9月9日付第2853号）

現地レポート

「土祭」から始めるプロモーション

～風土と工芸、人と暮らしの魅力を形に～

▼益子町のアートイベントの祭「土祭／ひじさい」は、第1回が2009年9月19日（新月）－10月4日（満月）に、前・土祭が2011年9月11日（幾望）に、第2回が2012年9月16日（新月）－30日（満月）に開催され、第3回を2015年9月13日（日／新月）から28日（月／満月）に予定している。写真は、特設の舞台で行われた芸能の様子。

栃木県 益子町（ましこまち）

農業と窯業・土の里、益子

広大な関東平野の中心・東京から北東へ車を走らせ2時間を過ぎる頃から、視界に広がる空の裾になだらかな山の連なりが見え始めます。栃木県益子町は、関東平野の北の端に位置し、同時に、八溝山系を中心に東北へと連なる山々の南の端でもあります。人の暮らしのすぐ隣にありながら豊かな自然を残す里山、はっきりとした四季。その風土の中で、古くから農業と江戸時代末期に始まった窯業という、「土」に依り暮らしに密着した産業が、人の手によって丁寧に営まれてきました。

窯業においては、今では窯を持つ陶芸家は400人を超え、年に2回開催される陶器市は、春秋合わせて毎回60万人を超える集客があります。また、欧米を中心とした工芸界においては、陶芸家で人間国宝となり、民藝運動の旗手でもあった濱田庄司の名とともにMASHIKOの地名は広く知られるところとなっています。

陶芸の町の、その先へ。

「益子町は、核となる観光の目玉があるからいいですね」とよく言われることですが、時として、それはマイナスの要素になる可能性も持っています。多くの観光客を集める陶器市にしても「年々、来場者の財布の紐は固くなる一方で」と嘆く声があり、益子駅から陶器店が並ぶ通りまでの間にある、かつてはさまざまな小売店が軒を並べていた旧市街地区は、シャッターを下ろす店が増え、活気をなくした状況にあることは否めません。そのような状況

ご当地キャラクター

「mashikotto」

において「現状を変えていかなければ!」という思いで策定したのが、2005年の「益子再生計画」です。「10年先、20年先を見据えて、益子にもう一度元気と活力を取り戻したい」という願いで、「環境」・「健康」・「文化」の3本柱を立て実行項目を策定しました。「文化」分野で「世界に誇れる文化都市、益子」を具体化していくための1つのイベントとして計画されたのが、2009年に第1回、2012年に第2回目を行った「アース・アート・フェスタ　土祭」です。

土の祭と書いて、「ひじさい」と呼びます。あえて、土の古来の呼び名「ひじ」を用いたことにも象徴されるように、今までにない視点から私たちの町をとらえ直し、外に向けて発信していこう、という試みです。アートによる地域起こしとしては、規模の大小やコンセプトなどの面でも実にさまざまなアートイベントが全国各地で展開されていますが、益子町が目指したものは、小さいながらも益子ならではの個性が光る祭です。中央からアーティストを招聘して街中に作品を配置して終わり、というものではなく、この土地の風土から、この土地にゆかりの作家たちによって立ち上がる表現です。作り上げていく過程も、イベント会社など外部の力に頼るのではなく、役場職員と住民の官民協働で、この土地の人々が心を入れて作り上げていく「祭」としてのイベントでした。

第1回は、「あらゆる生命の源である土」「民藝以前の益子」をテーマとし、旧市街地のシャッター通りを会場にしました。そして第2回は、「土」から一歩進み深めて、「風土、歴史、自然環境」をテーマとし、エリアについては、陶器店が並ぶ通りや、1194年建立と言われる神社が佇む益子の懐深く入り込んだ地域にも会場を広げました。歴史ある神聖な場所とはいえ、ふだんはあまり訪れる人もいない所に、人の手を入れて息を吹き返させ、地元の人もスタッフも来場者も、そこから生まれる表現を分かち合い、先人の遺産を未来に繋げていこうという願いがありました。

地球の上の小さな共同体として

東日本大震災では、益子も多くの被害を受け、あらためて「幸せな暮らしとは?」「今日の延長上にある未来とは?」について考えることが多い日々が続きました。官民あげて復興への道を歩み、2回目の土祭への準備を進める過程で、「これからの暮らし方について考える手がかりを創出していこう」と、「マシコ・アース・ヴィレッジ」という新しいコンセプトを加えました。

2012土祭

準備と会期中の様子。公式ウェブサイトhttp://hijisai.jp/

▶百本以上設置した「のぼり」も、間伐した竹や布を使って手作りで。

◀1194建立の神社では、境内とその周辺の森を散策しながら楽しめる「音」の展示を行いました。

▶歴史ある酒屋さんの奥座敷では、自然と命をテーマにした立体作品を展示。

先人たちの知恵、技術の背景にある思想などを学び直し、「益子から提案できる、暮らし方」を表現しようという試みです。間伐の竹で作ったテント、飲食ブースで使用した非電化冷蔵庫、夕方からの演奏会を行う広場に灯した和紙と竹の提灯などは、地元住民や近隣の高等学校の生徒さんたちとワークショップで制作しました。

都市生活者の共感を呼んだ土祭

土祭は、明日の町づくりのための実践とチャレンジの場であり、また、これからのプロモーションを考えるためのマーケティングの場でもありました。特に第2回目の土祭で集計した来場者アンケートの結果は貴重なデータとなりました。

4段階の選択肢で問いかけた満足度調査では、「とても満足52・4％」「まあまあ満足40・5％」との数値で93％の方に概ね満足の評価をいただきました。居住地の内訳で見ると、近隣では宇都宮市やつくば市など、また東京都内の数値が高く、大都市の方ほど土祭の世界観に共感し満足いただいている様子が、フリーアンサーの記述からもうかがえました。

「とても楽しめました。土地と作品の良さをどちらも活かせた展示だと思います。よりその世界に入り込むことができました。また訪れたいです。（東京20女）」「新旧がまじりあっていて、別世界を感じられて美しかった。迷っていると皆さんが親切に声をかけてくださり、地元の人の祭を盛り立てようとする気持ちが伝わりました。（東京60女）」

アンケート以外にも、ネット上で個人ブログやTwitter、FaceBook上にあげられた情報もできるだけ拾い、感想を収集しました。それらをもとに、益子町PRのメインターゲットとしたい属性モデルを「首都圏で働き、工芸やデザインに感度が高い30代の女性」と考え、次年度からのプロモーション事業の参考としました。

益子に関心を寄せてくださる人達が求めているものと、益子が持つ「資源」が、土祭をきっかけに、とてもいい感じで重なり合ってきている。そこに小さいながらも確かな手ごたえを感じました。それらをどう整理して、町の訴求として伝えていくか。益子町のブランディングを再構築することを課題として、2013年4月、観光商工課内の土祭事務局は新設されたタウンプロモーション係へとバトンタッチ。次に、益子町プロモーション事業、初年度の取り組みについてお伝えしたいと思います。

故郷の次に大切な町へ

都内から車や電車で2時間ほどの場所。リフレッシュできる自然環境に恵まれ、体に優しい食事ができる気の利いたカフェがあり、大量生産品ではなく、人の手のぬくもりがある手仕事の品が買えるような場所。メディアが喜びそうな、そんな田舎町は、益子以外にも、いくらでもあります。

町のPRを行っていくにあたっての1つのゴールイメージは、「首都圏で暮らす人にとって、自分の故郷に次いで、何度でも訪れたい大切な町として位置づけられること」です。

「大切な町」になるためには、消費行動から一歩踏み込んだところで、心のつながりを築くことが必要だと考えます。例えば、そこに暮らす魅力的な人と出会い繋がれる町、訪れるたびに知るたびに、これからの自分の生き方や暮らし方の手がかりが得られる町、自然や古い建物などの環境に都会暮らしで忘れかけていたような原風景を見出せる町、短時間でも地に足がついた体験ができる町…。まだまだ漠然とし

▶地元高校生と観光ボランティア団体が一緒に事前研修をして、観光客の方々をガイドしました。

◀伝統芸能や演奏会の舞台や屋台を設けた広場では、観光客や町民が一緒になって夕暮れ時の時間を楽しみました。

キャッチコピーとして、5月29日から6月10日までの13日間、渋谷の駅ビルに隣接した新しい商業施設「ヒカリエ」の8／CUBE1,2,3というギャラリーで、益子のプロモーション展示を行いました。「土」「森」「人と祭」をテーマにしたインスタレーションです。

使用したギャラリーは、毎年11月に公募を行っており、土祭を通して益子町がメインターゲットと考えている層にPRできる場所でもあり、感度が高く周囲への影響力も高く、有効な口コミを創出してくださる層が集まるフロアでもあります。

観光商工課土祭事務局（当時）で企画書を提出しプレゼンを実施。自治体のPRとしては前例がないとのことでしたが、12月に審査をクリアし、年明けから企画制作チームを組織して、打ち合わせを重ねながら準備を進めてきました。企画制作については土祭と同じく、外部のディレクターや展示のプロ集団に外注するのではなく、役場職員と益子在住の作り手たち、益子や土祭ゆかりの都内在住の写真家などの協働プロジェクトで行いました。展示が始まってからは、ご来場いただいたアート関係者の方などから、クォリティが高いとお褒めの言葉を頂きました。

会期中は、タウンプロモーション係の職員がシフトを組んで連日在廊し、来場者の方に対しての案内は、掲示するキャプションやサインボードに任せることなく、作品はもちろん、益子町や土祭についても、できるかぎり話しかけ、直接お伝えするようにしていました。その会話や、会場に置いた感想ノートなどから来場者の声を紹介します。「益子町は陶芸だけの町ではないんですね」「益子は心の処方箋」「行ってみたくなりました！」など、嬉しい言葉が並びました。

会期中2回目の日曜には、隣接するイベントコートで「益子の食卓市」も開催しました。「暮らしのまんなかにある食卓まわりのさまざまなものが益子では丁寧に作られている」ことをアピールする市で、陶器だけでなく、木工品、染織、野菜、果物、加工品、天然酵母のパンなどが並び、終了時刻までにぎわいを見せていました。

同じフロアのD&DEPARTMENTが運営するd47食堂では、タイアップ企画として、益子の野菜を用いて益子焼の器で提供する「益子定食」をメニューに加えていただきました。好評につき、会期終了後も8月1日までに延びました。

益子発、人と暮らしを伝える雑誌の創刊

2つ目の事業として、平成25年9月に益子町発信の本（年2回発行の雑誌スタイル）を創刊します。土祭と同じように、外注丸投げはしないで、官民協働の編集チームで企画から編集・制作までを行い、土祭データから想定したメインターゲットの方たちが集まる首都圏の店舗や施設、書店などで頒布していただく予定です。

目的は、先に述べた「故郷に次いで大切な町」として益子町を好きになっていただくため。この一言に尽きます。では、何を伝えるか？「益子の人と暮らし」を伝えます。どんな風に伝えるか？「情報ではなく情景」として伝えます。情景。これは、民間の事業との差別化としてのキーワードです。

益子町は、自主的にイベントなどでいますが、今後、さまざまな事業を通して深めていきたい課題です。

ふたつのチャレンジ

「何度でも訪れたい大切な町」を目指して、初年度は都内での益子町PRの展示イベントを行い、益子発信の雑誌の創刊準備を進めています。

「渋谷に土を。益子の森を。」を

を行う企画力と情報発信力がある陶芸家の団体がいくつかあり、また、生産者や作り手が中心となって行われる「市」も盛んで独自の情報発信を行っています。観光協会だけでなく、地域コミュニティや民間の任意団体も益子のさまざまな情報を独自のスタイルで発信しています。

イベントや店舗、商品などの「情報」を発信していくのが民間メディアとするならば、町の役割は、益子町の本質的な魅力をしっかりと伝え発信していくことだと考えます。この土地の風土と、そこに暮らす人、人の暮らし。その様子を丁寧に細やかに拾い、描き伝えていくことを「情景」という言葉で表現しています。

テレビでもネットでも紙媒体でも、次々に新しいモノゴトが伝えられる情報過多の時代です。まず、情景（＝本質的な魅力）を伝えることで共感をもって受け入れられ、基本的な信頼関係が築けたら、その相手から発信される観光情報も、受け流すことなく、キャッチしていただけると思います。

これからさらに多くの方々と出会い、大切な場所として心に留めていただけるようなＰＲ活動を展開していきたいと考えています。

益子町　観光商工課土祭事務局

（平成25年7月15日付第２８４７号）

2013都内でのＰＲ

渋谷ヒカリエ8／CUBE1.2.3 での展示とイベントの様子

ギャラリー入口の左右ウィンドウには、益子の原風景ともいえる大正～昭和初期の写真パネルと昔の窯道具などを展示した。中央に見えるのは、ＣＵＢＥ２に、人と祭の写真とともに設置した土舞台。供物台には益子で採れた麦や野菜を。

◀「森」の部屋。暗くした空間に益子の森の写真を大きく展示し、栃木の山中で命を落とした鹿の骨や角から彫られた彫刻作品を展示。益子の森で採取した鳥や虫の声、沢の音などで制作した音も流した。

▲連携イベント、「益子の食卓市」。30人あまりの出店者が来場者との会話を楽しみながら益子町と益子で作られる農産物や加工品、陶磁器、工芸品をアピール。

▲「土」の部屋。多彩な色と表情を持つ益子の土で作った急須と光る泥団子。什器も益子の土を用い左官仕事で制作。登り窯の窯出しの時に聞こえる「貫入の音」を採取・編集した音を流した。

▼「神流マウンテンラン＆ウォーク」スタートの様子

神流マウンテンラン＆ウォーク

～少子高齢化日本一の町が創った日本一のトレイルランニングレース～

群馬県 神流町（かんなまち）

神流町の概要

本町は、群馬県の南西部に位置し、関東一の清流とも言われる「神流川」が流れ、林野面積が町総面積の88・3％を占める自然豊かな町であります。

また町の中央部を東流する神流川の両岸は、極めて急峻な地形が連続し、支川が複雑に入り組んでいることから、その間のわずかな緩斜地に集落が点在しております。

産業については、農林業が主体であった産業形態も資材価格の低迷や従事者の高齢化、後継者不足等により衰退してしまい、商工業においても四方を急峻な山々に囲まれていることから広大な用地の確保が難しく、僅かな平地に中小企業が点在しているのみであります。

交通については、町の中央を走る国道462号が交通の大動脈となっており、これに3県道が接続し、併せて国道299号が埼玉県へ通じております。本町には鉄道はなく、唯一の公共交通機関である路線バスが、自家用車を利用できない交通弱者の足の確保、通勤、通学など地域住民の日常生活にとって必要不可なものとなっておりますが、近隣の市街地、最寄駅までは車でも1時間程度を要してしまいます。

このようなことから、進学・就職を機に転出する町民も多く、過疎化・少子高齢化が急速に進行し、町の高齢者比率は53％を超えております。国立社会保障・人口問題研究所が発表した「将来推測人口」によると、2035年には神流町の高齢化率が日本一となると推計されました。

取り組みの動機と経緯

本町は、人口2、242人（平成26年2月1日住基）の小さな町ですが、観光客を温かく迎え入れる人情味あふれる町民と、雄大な自然という2つの

大きな財産がありますので、これらを核として、観光事業の充実や都市交流の促進などを積極的に推進し、町の活性化へと発展させることができる活性化策を模索しておりました。

そんな中、群馬県藤岡行政事務所（現藤岡行政県税事務所）職員と鏑木毅さん（当時、群馬県庁職員。現プロトレイルランナー）が来庁し、町の活性化を目的に「トレイルランニング大会」の提案を持ちかけてくださいました。

しかし、聞いたこともない言葉にそこにいた誰もが「トレイルランニングって何？」という状況でありました。話を伺ってみると「トレイル」とは、登山道や林道など、場所の高低に関わらず、舗装されていない未舗装道を意味し、そこを走るスポーツを「トレイルランニング」（以下「トレラン」という。）ということがわかりましたが、大会を開催するに当たり参加費を支払ってまで山の中を走る人がいるのかと半信半疑の状態でした。

ただ、詳細を聞いていくうちに、先に述べた大きな財産を最大限活かせるのではないかということで、トレイルランニングを通して町の活性化を目指すこととなりました。

取り組みの内容

「トレラン」というものがどのようなスポーツなのかは理解できましたが、何の知識もありませんので、これを大会にするためには非常に多くのことを検討しなくてはなりませんでした。

そのため、町民の方にも「トレラン」を知ってもらうことから始めようと、実行委員長に神流町長、プロデューサーに鏑木毅さんを迎え、17の地域団体が参加する実行委員会を発足いたしました。

何もわからない状態ではありましたが、群馬県藤岡行政事務所の全面的なバックアップをいただきながら、「神流町らしさ」を全面に押し出したオリジナルの大会を作り上げるため連日会議を開催し、来町者を歓迎する様々なアイデアが提案されましたので、実際に行っている特徴的な取り組み内容についてご紹介いたします。

●コース設定

トレイルランニングに欠かすことのできない、コースの選定と整備です。

現在は、50㎞を含めた3つのカテゴリーがありますが、当初は27㎞と40㎞の2つのカテゴリーでした。長距離の山道を周回コースとするために、山に詳しい町民や、高齢者に古道を聞いて、何日も何日も山に入り、既存する登山道と併せランニングコースをつないでいきました。古道といっても、崩落や倒木などがひどい箇所がたくさんありました。さらに希少植物がある山道を大勢の選手が走ることから、自然保護団体にも協議し助言をいただきながら、コースとして使用できるかを判断、その後大会に適した距離になるようコース設定をしていきました。

コースが決まったら、町内外からもボランティアを募り、倒木の撤去や草刈り、選手が道に迷わないよう目印のリボンや案内板等を設置するコース整備を行いました。ほとんど人の入ることのない古道や道のないところに道を作ったりしましたので、初めのコースづくりは大変苦労しました。しかし、各山々をつなげた道が整備できたことから、この大会以外にも登山道として利用が可能となり、観光面でも活用できるようになりましたので、現在は、ハイキングコースとしても多くのお客様に利用していただいております。

▶「トレイルランニング」コース選定

●エイドステーション

コース上には、エイドステーションといわれる選手の休憩所を設けております。そこでも「おやき」や「柚の

▶標高1000mに配置された「持倉エイド」（休憩所）

甘漬」など地元の食材を使ったものを提供しております。また、コース上で一番の人気エイドが、標高１０００ｍに位置する「持倉」という集落でのエイドです。

持倉集落は、人口12人、高齢者比率１００％のいわゆる限界集落ではありますが、おじいちゃん、おばあちゃん達がそこの畑で作り、採れたものを使った手打ちそばや花豆が選手全員に振る舞われるため、これを楽しみに参加される選手の方もいらっしゃいます。

●ゴールゲート

本大会では、空気を入れて簡単にできるドーム型のゲートは使わず、昔神社のお祭りなどで使っていたという「杉の葉」のゲートを造っております。

材料となる杉の葉は、町内の間伐した杉を所有者から譲っていただき、トラックや工具なども町民の方の協力により造り上げております。

大会当日は、このゲートをバックに選手全員のゴール写真を撮り、後日ゴール写真入りの完走証を完走者全員に配布もしております。

▶杉のゴールゲート

●参加賞

選手に配布する参加賞についてですが、押し花のプレート、木製ネームプレート、地域振興券を配布しております。

押し花のプレートは、商工会女性部の方が中心となり作製していただいておりますが、材料となる押し花も何カ月も前から準備し、一つ一つ押し花絵を作り、プレートにしていきます。

木製のネームプレートは、ナツツバキ（シャラの木）を使用します。資材の提供、材木の切断など、町民の方のご協力をいただき作製します。記念にオリジナルロゴの焼き印を押しますが、これも町民の手作り。選手の名前を一人一人書き入れ、配布しております。

◀手作りのネームプレート

押し花のプレートもネームプレートも一枚一枚作製するので、非常に時間のかかる作業ではありますが、町民の方が、記念になればと心を込めて作製してくれます。

地域振興券は、参加費の中から１０００円分を選手にキャッシュバックし「１０００かんな」という大会期間中限定の地域振興券として発行しております。

「神流マウンテンラン＆ウォーク」は「地域の活性化」が最大の目標でありますので、極力町内で買い物をしていただこうと考案したものです。

●大会前日イベント

本町にお越しいただくせっかくの機会ですので、神流町また田舎というものを体験していただこうと豆腐作りやこんにゃく作りなど５つのメニューの「山村体験」を用意しており、希望される選手には体験をしていただいております。

また、選手を迎え入れ、歓迎したいということでウェルカムパーティーを開催しております。ここでは、町内のお母さん方を中心に神流町の郷土料理を振る舞い、お袋の味を選手へ提供してくださいます。お酒は、手作りの竹コップ・竹徳利を使用し、「イワナ

▶ウェルカムパーティー

の骨酒」など飲み物でも神流らしさを追求し、提供しております。

こうした町民の方の温かい歓迎が人気を呼び、ウェルカムパーティーを目的に大会に参加される方もいらっしゃるようです。今では、会場である小学校体育館内を歩き回ることができないほど、参加希望者が増えております。

●民泊制度の導入

本町には、宿泊施設が3件（旅館1軒、民宿1軒、公共の宿泊施設が1軒）のみであり、前日からの参加を希望する多くの選手を受け入れることは困難な状態でした。そんなとき町民の方から「うちに泊めてもいいよ」という言葉をきっかけにボランティアという形で民泊制度を取り入れ、今では40件ものお宅で選手の受け入れをしていただいております。

また、この民泊制度を通し、町民と選手との交流が生まれ、大会以外にも新たな交流が始まりました。

▶町村と選手との交流が生まれる民泊

現状と今後の課題

平成21年に第1回大会を開催いたしましたが、人情味あふれる町民の温かなおもてなしが人気となり、回を重ねるごとに700名の定員が十数分で締め切りとなってしまうほど大変人気の大会となりました。ランナーのためのインターネットサイト「ランネット」でも、4年連続トレイルランニング部門全国1位の評価もいただいております。

これだけの高い評価をいただけるのも、神流町の子どもから高齢者、男性、女性がそれぞれ得意分野を活かし、それを実行しながら大会に関わっていただいたことや、大会を成功させる以上に来町された方を歓迎したい、楽しかったと気持ちよく帰ってもらいたい、そんな町民の方の気持ちの賜物だと痛感しております。

また、こういった町民の方の取り組みが評価され、平成24年度には過疎地域自立活性化優良事例として総務大臣表彰を受賞いたしました。

今までは各種事業やイベントにおいては、比較的行政主導で物事を進めることが多くありましたが、神流マウンテンラン&ウォークを通じ、行政主導から町民主導へ移管のきっかけづくりにもなったと感じます。さらには人情味あふれる町民・地域と行政が一体となったイベント作り、一過性でない、年間を通じた交流人口の増加など、こういった多くのことを感じ、実践することができました。

冒頭で申し上げたとおり、本町は高齢者比率が53％を超えており、過疎化・高齢化が進行する限り、高齢者比率の増加や人口流出は益々深刻な問題となってしまいます。

本大会の一番の目的は「町の活性化」です。ただ、活性化といっても町が元気になることが活性化なのか、財政が潤うことが活性化なのか、人口が増えることが活性化なのか。最終的な目的は列記したものを全てクリアすることだと思います。

過疎地域ではありながらもイベントだけではなく、日常生活でも一人一人ができることを行い、町外の方との交流が広がり刺激を受けることは、町への誇りと元気を持つ「活力ある町」へとつながり、それを継続していくことにより町民主体の地域活性化につなげていきたいと強く思います。

神流町長　宮前　鍬十郎

（平成26年3月10日付第2872号）

▲イベント終了後の記念写真

「歴史を活用した地域活性化・観光事業」の取り組み

～「天保水滸伝」おらが町の物語～

▼みどり広がる水田地帯

千葉県 東庄町（とうのしょうまち）

東庄町の概要

都心から車で東に向かい2時間ほど走ると、利根川の雄大な流れにたどり着きます。千葉県東庄町は利根川の下流域、関東平野の東端、豊かな自然を有する水郷筑波国定公園内にあります。利根川の堤防に立てば360度、視界を遮るものはなく、初夏には水稲が緑のじゅうたんのように広がっています。

古くから「東（とう）」の荘園として稲作が盛んで、江戸時代には米作りと醤油の醸造、また、江戸への利根川水運の拠点のひとつとして、船荷の積降ろし、荷物の集積所として栄えたと言われています。また、歴史と伝統が今も引き継がれ、20年に一度「東大社式年神幸祭」というお祭りがあり、荘厳な時代絵巻が繰り広げられます。

昭和30年神代村、笹川町、橘村、東

▲20年に一度開催される「東大社式年神幸祭」は、900年の歴史が息づく時代絵巻

東庄町イメージキャラクター

「コジュリンくん」

城村の1町3村が合併した、東西9㎞、南北10・5㎞、面積46・16㎢の豊かな自然に囲まれた町です。中央が東総台地の丘陵部で南部、北部に傾斜して低地が広がり、中央の丘陵部は畑地帯、北部南部の低地は肥沃な水田となっています。

海に近いことから急激な天候の変化も少なく、年間平均気温は15℃前後と温暖な土地柄です。この温暖な気候を生かした、イチゴの栽培が盛んで、イチゴ狩りに多くの観光客が訪れ、大粒のイチゴ「アイベリー」が高い人気を集めています。

地域活性化への取り組み

東庄町では、町を活性化する事業の推進を図ることを目的に、平成21年度から「地域活性化事業補助金制度」を実施しています。

この事業は、「町を元気にする」知恵とアイディアを募集するもので、地域の活性化に向けた起爆剤として利用してもらうことを目的としています。事業の内容は問わず、住民代表で構成する審査会で審査され、認められると事業実施の補助金が交付されます。

年度別の事業費は、平成21年度は2事業で380万円、平成22年度は3事業で490万円、平成23年度は3事業で140万円、平成24年度は5事業で725万円の補助金を交付しており、地域の活性化を図ってきました。

代表的な事業としては、広大な利根川河川敷を臨時飛行場として利用し「RC（ラジコン）航空ショー」を3回実施、いずれも2万人を超える集客事業となりました。

▶東庄音頭ぼんおどり会

◀大相撲夏合宿のひとこま（赤ちゃんの土俵入り）

また、相撲が地域の祭事と一体になっている土地柄でもある関係から、8月の2週間にわたり大相撲力士の夏合宿を招致している団体の「出羽海部屋笹川夏合宿」が事業化になり、相撲のまちをPRし、早朝の朝稽古にもかかわらず町内外から大勢の方々が見物に訪れています。他には、コンサートや東庄音頭を踊るぼんおどり会、よさこいオリジナル曲の作成など、いろいろな事業に取り組んでいます。更に町の観光協会がこの補助金を活用して、観光ガイドブック「るるぶ東庄」を増刷し、各種イベントや行事において町の観光PRを行っています。今後も知恵とアイディアを生かし、町を元気づける活性化事業を応援していきたいと考えています。

町の魅力を発信～観光ガイドブック「るるぶ特別編集 東庄」～

多くの自治体が東日本大震災以降、地域経済の低迷や多くの課題を抱え、益々厳しくなる財政の状況下で、とかく各自治体からの情報発信が難しくなってきているところですが、東庄町では、平成23年度、緊急雇用創出事業を活用した「観光ガイドブック るるぶ特別編集　東庄」を作成しました。この観光ガイドブック作成事業は、わが町の魅力を、近隣4市との広域観光の魅力と合わせて全国に発信したものです。そこには、近隣地域と一体にならなければ観光事業が成り立たないという小さな自治体の特徴も現れており、

◀るるぶ特別編集「東庄」

短所を長所に変えるべく地域全体の観光振興を目的として作成しました。

この町を含めた近隣の観光資源をガイドブックとしてまとめた「るるぶ特別編集　東庄」を発行し、広く内外にＰＲしたことにより小さな町でも情報発信ができるという自信がつき、更なるＰＲに乗り出しました。

「天保水滸伝ＮＥＯ」の誕生から

浪曲、講談、映画などで大正時代から昭和40年代まで広く全国に知られた「天保水滸伝」は東庄町が舞台となっています。登場する任侠の男たちの多くは、この地方の村々に実在した若者たちであり幕末という混乱の時代を生きた物語です。

この物語を若い人にも知ってもらおうと、平成24年度の緊急雇用創出基金事業を活用し、天保水滸伝をアニメで制作し、千葉テレビにおいて放映する事業を実施しました。

しかし、アニメでこの天保水滸伝の物語の内容をすべて盛り込むことは収録時間の関係上困難であったため、まったく新しい内容で「天保水滸伝ＮＥＯ（ネオ）」というアニメを作成するとともに、アニメのキャラクターが町の見どころをレポートするという形で制作、天保水滸伝と町の観光ＰＲを一緒に千葉テレビで５回にわたり放映しました。

そして、平成25年度は、東庄町商工会が、「浪曲や講談という伝統芸能に親しんでもらい、町の歴史・観光として天保水滸伝を広く内外へＰＲしよう」と、「天保水滸伝浪曲・講談会」を町公民館大ホールで開催し、町内外から大勢の観客が来場しました。この浪曲・講談会は地域活性化事業補助金を活用して実施しています。

▶アニメ　天保水滸伝ＮＥＯ

まちぐるみ観光おもてなし推進会議の発足

さて、観光ガイドブックの作成やアニメを使った観光ＰＲなど、工夫を凝らしながら、町、観光協会、商工会、観光いちご組合、農業団体等で協力しながら観光振興に取り組んできた結果、町民の間にもようやく観光客を迎えたいという意欲が芽生えてきましたが、まだ観光客へのおもてなしについて具体的にどのように取り組むのが効果的なのか、知識が十分ではありません。

そこで、県の観光補助事業を利用して、観光客へのおもてなしについて造詣の深い専門家を招き、町をあげて「おもてなし運動」を行うにあたっての留意点等について講演をしてもらい、具体的なアドバイスを受け、官民一緒に町を検証する「観光おもてなし推進実行委員会」を発足させ、「まちぐるみおもてなし推進事業」を実施しています。

▶自転車で千葉県を周る〝ツールドちば〟ご一行様を「おもてなし」

これにより観光客を迎えるにあたっての「おもてなし」が向上することを目指し、また、観光ＰＲの「仕掛け」として、新しい観光ガイドブックにスマートフォンを使うことで動画が見られる新たな仕様により、話題性のある観光マップを導入しました。

観光ガイドブックの動画による効果で、観光客に旅館や飲食店等を身近に感じてもらい、心の触れ合いを大切にし、地元特産品を使った料理、お土産品の販売促進や、これまでは素通りされていた町の中を歩いてもらうことで観光客の滞在時間を増やしたいと考えています。

この観光ガイドブックに動画が現れる新たな仕様により、天保水滸伝のアニメ化を手掛けた次の展開が始まっている「アニメ 天保水滸伝ＮＥＯ」を活用していき、若年層に関心を持ってもらうチャンスとしていきます。更には天保水滸伝のもう一方の舞台である旭市と連携し遺跡めぐりや、主人公の共有などを通して広域観光を推進していきます。

今後の展開としては、東庄町の「おもてなし力」を向上させるとともに様々な角度からサービスの向上や観光地ブランドを確立してリピーターを獲得し、販売や商業ベースでの事業効果を上げたいと考えています。

観光事業に限らず、地域の活性化事業、様々なイベント等で「まちづくりは、地域で暮らす人々による支え会い」を念頭に町民と行政が力を合わせ一体でまちづくりを進めていきます。

東庄町長　岩田　利雄

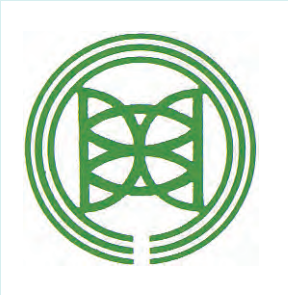
（平成25年10月7日付第2856号）

村民融和のむらづくり
「大したもん蛇まつり」と「コミュニティ活動」

▼大蛇パレード

新潟県　関川村（せきかわむら）

関川村村章



村の花「ユリ」

山と川といで湯の里

関川村は、県都新潟市の北東約60㎞に位置し、村の中央を流れる荒川が日本海へと注いでいます。村の面積は東京23区の半分以上にあたる299・61㎢という広い面積ですが、荒川流域の一部を除き起伏が激しく、約88％は山林原野。緑美しい農山村です。

荒川沿線には高瀬・鷹の巣・雲母・湯沢・桂の関の5つの温泉が湧き出て、えちごせきかわ温泉郷を形成しています。村の中央には国重文・渡辺邸や佐藤邸など18世紀の街並みが残っており、古くから交通の要所として栄えた米沢街道を今に伝えています。

村の主幹産業は農業とサービス業。稲作を中心とした兼業農家が多く、農業と観光の村です。

自然豊かな環境を守り育てながら5つの温泉資源の活用を図り、歴史、伝統を次代に継承し香り高い文化を育みうるおいに満ちた美しい村づくりを目指しています。

大したもん蛇まつり

①まつりの見どころ

長さ82・8m、重さ2トンの大蛇が、村内を練り歩きます。「世界一長い手作り蛇」として2001年にギネスにも認定されたユニークで豪快な大蛇のパレードが、まつりの主役です。

500人もの村民が、交代しながら大蛇を担ぎ上げ、村内をパレード。見物していても十分楽しめますが、飛び入りも大歓迎。長さ25mの子ども用小大蛇も一緒に練り歩きます。

②大蛇の作り手

大蛇は、頭部のほか胴体は54のパーツに分かれます。胴体は、竹とワラを材料にして村の54の全集落が分担して制作しています。竹は約200本、約

30アール分のワラを使用。竹で骨組みを作り、そこにワラをロープでつけていきます。ロープの編み方によって蛇のウロコを表現しています。集落の皆さんが幾日も集落センターなどに集まって制作したものを、まつり当日につなぎ合わせます。大蛇は傷み具合をみながら3～4年ごとに制作。これまでに8体の大蛇をつくっています。

③まつり誕生秘話

むらづくりは人づくりから――。人材発掘（育成）を目的に村が開塾した「せきかわふるさと塾」の塾生の発案で、1988年にまつりが始まりました。

村にはこれまで、村民全員が参加して楽しむ村全体のまつりがありませんでした。情報化社会の波に押され、田舎のもつ良さである地域の連帯感が薄れつつあるため、村民一丸となって取り組めるまつりを考案。都会にはない村の良さを引き起こし、それを肌で感じ、村に生きることの喜びと自信をもってもらうことがねらいでした。

▶大したもん蛇の制作風景

④なぜ大蛇？

村は、1967年（昭和42年）8月28日、羽越大水害に見舞われ、多くの犠牲者を出しました。その水害を風化させることなく、水害で得た教訓を後世に伝える契機にしようと、まつり創設にあたり考えられました。

また、村には「大里峠」という伝説があります。この伝説は、禁断の蛇の味噌漬けを食べた若い人妻が、蛇に化身され、やがて大蛇に成長し、自分のすむ場所をつくるため、荒川をせき止めて関川村を大湖にするというもの。この伝説は、見方によっては大水害を物語にしたものとも言われています。

◀羽越大水害に見舞われた村の中心部（下関）

このようなことから、「大里峠」と「羽越大水害」の二つをテーマとし、水害発生日前後にまつりを開催。また、大蛇の長さもこれにちなんで、82・8mとしています。竹とワラを材料にして制作しようと考案したのは、せきかわふるさと塾生の畳職人のアイディアによるものです。

まつりを通した交流
まつりサミットin関川村
10月6日（日）に開催

大したもん蛇まつり発足から25周年目を迎えた巳年の今年、10月6日に関川村で、まつりサミットin関川村を開催することとなりました。これは、全国各地から知名度の高いまつり団体が一堂に会し、交流を深めようというもの。近隣市をはじめ20程度のまつり団体を招致する計画です。

◀「大里峠」紙芝居の上演風景

まつり開催にあたっては、若者たちがプロジェクトチームを組織して、その内容を検討。村には人材発掘の場にしようという狙いがあります。まつり当日の成功だけではなく、その過程を重視し、産業振興と人材発掘に力を注ぎます。

大したもん蛇まつりは、年1回の開催ですが、そのほかにも県内外のまつりに参加し、大したもん蛇パレードを行っています。とくに、政令指定都市・さいたま市で開催されるイベントには何度か参加し、交流を深めており、まつりサミット開催はこれの縁によるものです。

また、平成24年6月には、ふくしまフェスティバルにも参加しています。これは、東日本大震災による原発事故の風評被害を払拭しようと、全国からまつり団体が集結したもの。会津若松市の市街を大したもん蛇が練り歩き、沿道に集まった福島市民と一体となって、大蛇パフォーマンスを披露しました。

▶会津若松市街での大蛇パレードの様子

大学生との交流も10年

国際ボランティア学生協会（IVUSA）との大したもん蛇まつりを通じた交流も10年が経過しました。この協会は、国内外で社会貢献活動をしている大学生のNPO法人。1200名の学生が登録していて、毎年8月になると100人から150人の学生が村を訪れ、まつりの準備や当日の運営に携わっています。

また、大したもん蛇まつりだけではなく、冬のまつりや体育協会行事、お年寄りの地域の茶の間などにも顔を出し、年間を通じて学生の視点での交流が続けられており、村に対するビジネスプランの提案なども――。民家や公共施設の雪処理ボランティアも検討されています。

村の原点は、集落とコミュニティ

関川村を元気にするには、コミュニティ組織の母体である54の集落が、それぞれ持っている有形無形の資源を自らの発想と実施に向けた努力で前進させることが必要であるという考えから、「むらづくり54作戦」と称した集落の計画づくりを行っています。計画

◀学生と交流を深めた雪ほたる祭

大したもん蛇まつりの経過など

1988年８月
　第１回目開催
　日本イベント大賞奨励賞受賞
1989年10月
　ふるさと東京まつりに参加
1991年８月
　丸山大橋開通記念パレード
　（市町村道アーチ橋日本一）
1995年８月
　新潟ふるさと村（新潟市）
1997年６月
　羽越水害30周年記念パレード
2001年１月
　21世紀巳年元旦記念パレード
2001年４月
　新潟総合スタジアム・ビッグスワン
　（新潟市）新潟緑の百年物語
2001年６月
　「竹とワラでつくられた世界一長い大蛇」としてギネス認定

2002年６月
　ワールドカップ・ウェルカムパレード（新潟市）
2003年10月
　咲いたまつり2003（さいたま市）
2004年４月
　第８回ふるさとイベント大賞受賞
　（祭り・イベント部門賞）
2006年11月
　新潟日報文化賞受賞
2008年10月
　まつりサミット（さいたま市）
2009年９月
　トキめき新潟国体オープニングセレモニー（新潟市）
2012年５月
　ふくしまフェスティバルin会津
2012年８月
　第25回目開催、第８代目完成

◀地域活性化事業申請の公開審査会

また、地域コミュニティには自主防災組織の役割も担っていただく必要があることから、消防団組織の見直しを行い、7つの分団を3分団にしたうえで9つの「地域隊」を設け、コミュニティ組織と連動した活動ができるように再編成しています。

村では、地域づくりを推進するため補助率3／10～7／10の「むらづくり総合推進事業補助金」を用意しています。人材育成事業や地域連帯事業、施設整備事業、環境改善事業、むらおこし実践活動事業、自主防災組織支援事業など、あらゆる活動を支援。通年の活動費もこの補助金によって交付しています。

さらに地域活性化の機運を高めようと村税の約1％にあたる700万円を予算化し、補助率100％も認める特別事業を平成22年度から実施。応募のあった事業提案は、公開審査によってその可否や補助額を決定するしくみで、住民代表等がその審査にあたります。

地域のすべての問題について行政が細かく対応するには限界があり、村と地域コミュニティ・集落などとの協働という考え方を推進しています。

書の成果品よりも、策定までのプロセスや計画づくりに関わった住民同士のつながりを重視しています。

そして、54の集落を9地区に括った地域コミュニティを、昭和50年代後半以降平成10年までに組織化させ、「地域力」の維持・向上を図る母体としての役割を担っています。

地域コミュニティには、ひとつの集落ではできないこと、行政では実施できない事業等に取り組んでいくことが求められています。

自立10年 キラリと光る村づくりを

昭和29年8月、関谷村と女川村が合併、新しく関川村が誕生しました。関谷・女川両村は、自然や歴史、産業、経済、文化、民俗などあらゆる面において共通点をもち、一つとなって自治体の強化を期そうとする合併は、極めて自然の成り行きでした。

以来60年、豪雪、大地震、大洪水など未曽有の大災害に襲われ甚大な被害を被りましたが、村民のたゆみない努力によって困難を克服。緑に囲まれた美しい郷土は立派に再生しました。

村の中央を東西に横断する国道113号線を中心とした交通網も整備され、村営温泉も加わって形成したえちごせきかわ温泉郷などの観光資源も豊富であり、山と川といで湯の里として、発展しています。

21世紀に入り、にわかに吹き荒れた国主導による市町村合併の嵐は、全国の自治体をその渦中に巻き込みました。しかし、関川村はこの奔流に流されることなく、自立の道を歩むことにしました。国の構造改革と地方分権の推進によって、地方財政は極めて厳しい状況に置かれていますが、これをひとつのチャンスととらえ、小さくてもキラリと光る村にするために、村民と行政がともに手を携え、一丸となってむらづくりに取り組んでいます。

関川村長　平田　大六

（平成25年4月15日付第2837号）

▶村の中央を荒川が流れ日本海へと注ぐ

現地レポート

笠置ファン獲得へ！
～全国ご当地鍋フェスタの取組み～

▼全国ご当地鍋フェスタの様子

京都府 笠置町（かさぎちょう）

笠置町の概要

京都府相楽郡笠置町は、府南端に位置し、大阪から約1時間、奈良から約30分の距離にあり、都会から遊びに来られる方が多い町です。また、面積は23・57㎢となっており、その8割を森林が占めています。人口は昭和22年のピーク時の約3、300人から減少が進み、現在は府下で最も少ない約1、550人となり、高齢化も進むなど、高齢化率は41・4％（平成26年3月末）と、府下で2番目に高い割合となっています。

笠置町は観光が主な産業となっており、木津川の自然を活かしたカヌー、ボルダリング等のアウトドアスポーツ

▲虚空菩薩蔵磨崖仏：制作から千年以上の年月が経過しても形を残している貴重な磨崖仏です。

総務省の「過疎集落等自立再生対策事業」を活用した地域活性化事業「笠置町 探られる里プロジェクト」から生まれた冊子

http://www.town.kasagi.lg.jp/machi/kanko/ikikatatyou.html

や鎌倉倒幕を企図した後醍醐天皇の挙兵・籠城の舞台となり、紅葉の名所でもある笠置山、きじ鍋・ボタン鍋等の味覚等が観光資源となっており、さくら名所百選に選ばれている府立笠置山自然公園の桜も見所の一つです。また、笠置山頂の笠置寺は日本最古最大の弥勒磨崖仏があり、同じく、虚空蔵磨崖仏もあります。そして、笠置寺は東大寺のお水取りの起源とされており、東大寺の二月堂と関連がある正月堂があります。

笠置町はこれらの観光資源を活かし、さらなる発展のために新しい取組みやイベントを企画し、笠置町 探られる里プロジェクトや全国ご当地鍋フェスタなど様々な事業に取り組んでいます。

▶活性化ワークショップの様子

笠置町 探られる里プロジェクトで魅力を発信!!

「笠置町 探られる里プロジェクト」は、総務省の「過疎集落等自立再生対策事業」を活用し、町内外から集まった参加者とstudio-L（代表：山崎亮氏）、京都府の協力を得て平成25年度から実施している取組みです。町内の地域資源を見直して新たな魅力を発見し、多くの人々にそれらの魅力を発信・紹介する冊子「笠置のイカした生き方帖」をまとめました。

平成26年度には、財団法人自治総合センターの「コミュニティ助成事業」の採択を受け、これまでに発掘した笠置町の魅力や地域資源を基に、持続可能な地域づくりを進める新たな試みとして、ワークショップ及び社会実験「かさぎ－カッサイ－」を開催しました。10人程度のチームを4つ編成し、観光客などを対象に、笠置の食材を使ったバーベキューや風車づくり、手軽に参加できる写真コンテスト、地域住民による笠置にまつわるお話、飛鳥路地区の伝統文化しめ縄づくりを行うなど、笠置の〝いいとこ見つけ〟〝いいとこ磨き〟を行いました。

全国ご当地鍋フェスタも含め、これまでの活動を通して得られた実績や人の繋がりを活用し、持続的なプラットフォームを構築し、息の長いまちづくりを進めていきます。

◀活性化フィールドワークの様子

食文化のまちづくりを目指した全国ご当地鍋フェスタの取組み

笠置町では、「全国ご当地鍋フェスタ」を毎年開催しています。

平成23年に開催された第26回国民文化祭京都2011を契機に、平成22年にプレイベントとして、近畿地方からご当地鍋を招致したご当地鍋フェスタを開催しました。そして、翌年の国民文化祭開催年には、全国各地からご当地鍋自慢を招致した全国ご当地鍋フェスタを開催しました。

笠置町では、過疎化や高齢化が進行し、観光入込客の減少が続いている

ことから、地域活性化の一環として名物料理である「きじ鍋」に着目し、これをＰＲする場として全国ご当地鍋フェスタを開催し、食と地域の文化交流を図ることにしました。

きじ鍋が笠置町で提供されることになったきっかけは、町内にある旅館の亭主が笠置にあう食材を求めて辿り着いたのが「きじ肉」であったことに始まると言われています。

きじ肉はたんぱく質が多い一方、脂肪が少なく、鶏肉よりもカロリーが少ない高級肉です。きじの味に惚れこんだ旅館の亭主が地道な努力とＰＲ活動により旅館の名物料理となり、現在では、町内全ての旅館できじ鍋が提供されています。

平成22年のご当地鍋フェスタでは、町内の旅館等で提供されているきじ鍋をイベントを通じて販売するのは、町として初めての試みでした。この試みは、いかに低価格で高級なきじ鍋を美味しく来場者に食していただけるかを商工会女性部等の方々が研修や試作を行い、どのようにＰＲや販売ができるかを検討してきた結果、現在、きじ鍋の販売は大変好評を得ることができています。

全国ご当地鍋フェスタでは、きじ鍋を中心に全国からご当地鍋を集めて、来場者による投票でグランプリを決定するイベントをはじめ、全国のご当地グルメの出店販売やご当地キャラのステージイベントやキッズイベントなど、多彩なイベントで来場者を盛り上げています。

国民文化祭を終え、笠置町では、今後も全国ご当地鍋フェスタを継続して実施していくため、平成24年7月に全国ご当地鍋フェスタ実行委員会を新たに立上げました。そして、平成26年12月7日（日）には、西は大分県から東は静岡県まで合計21団体の鍋が集まる、第5回全国ご当地鍋フェスタ「鍋−1グランプリ」を開催しました。

今後も笠置町の恒例イベントとして全国ご当地鍋フェスタを周知し、これをひとつのきっかけとして観光客の誘致を図り、地域住民一体となって盛り上げ、「きじ」を地域の大切なブランドとして、魅力ある地域づくりを目指しています。

このように、笠置町ではまちづくりや地域活性化に向けて、様々な事業を通じ、町の自然を最大限に活かして、観光振興及び地域の活性化に取り組んでいきたいと考えています。

笠置町長　松本　勇

（平成25年3月11日付第2832号）

▶全国ご当地鍋フェスタの様子

◀きじ鍋の販売を行う笠置町商工会女性部のみなさん

全国ご当地バーガーの祭典「とっとりバーガー・フェスタ」の試み

～食と交流を通じた地域活性化に向けて～

伯耆町町章

▼中国地方最高峰を誇る「大山（だいせん）」。伯耆町から見る山容は伯耆富士とも呼ばれる。

鳥取県　伯耆町（ほうきちょう）

地域資源を活かした観光づくりを目指して

伯耆（ほうき）町は、平成17年1月1日、西伯郡岸本町と日野郡溝口町との2町が合併し、面積が149・45㎢、世帯数及び人口が世帯3、733世帯、人口12、612人、65歳以上の高齢者3、485人、高齢化率27・6％、14歳以下1、534人（平成17年4月住民基本台帳人口）で、少子高齢化と人口減少が顕著で、そのうち、65歳以上の独居老人世帯は、460世帯、12・3％となっています。

鳥取県西部に位置する中国地方最高峰である「大山（だいせん）」の山麓には、自然環境に恵まれ、スキーや登山など、多くの観光客が訪れる観光地として、また、大規模なリゾート開発によるゴルフ場・リゾートホテルをはじめ、各所に点在する別荘地やペンション村など、多種多様な施設が点在しています。伯耆町内だけでも、ゴルフ場5箇所、リゾートホテル1棟、ペンション26軒、別荘地も2、500区画を超え、法人の保養所を含めた別荘は大小含めて800軒あまり立ち並んだリゾート観光地となっています。大山山麓には、年間100万人以上の観光客の入り込みがあり、特に、伯耆町内は、別荘のオーナー及びペンションの固定客など、来訪者のリピート性は高いです。

また、大山を背景に、雄大な土地が広がっており、澄んだ青空から注がれる太陽の光と、大山から流れ来る名水、そして、大山の火山灰の真っ黒な土壌「黒ぼく」から生産される白ねぎ、白菜などの農産物や黒ぼくの牧草で育った伯耆和牛の畜産物などの特産品は地域の自慢です。

大山山麓の自然豊かな黒ぼく地帯で生産される農産物は、おいしいと言われていますが、生産者の高齢化、後

継者不足で一定量以上のロットが確保できなくブランド化まで至っていない状況です。町営の特産品直売所等も運営していますが、生産者の高齢化によって出荷量が伸び悩んでおり、観光客やリピーターなどへの地域特産品の販路確保・拡大など多くの課題を抱えているのが現状です。

なぜ、大山で「とっとりバーガーフェスタ」なのか？

地域食材を活用したご当地バーガーといえば、「佐世保バーガー」が有名ですが、伯耆町でも町内事業者有志により、大山周辺の食材を活かしたご当地バーガーの開発が進められ、伯耆和牛のフィレステーキを挟んだ「大山バーガー」が平成21年に商品化され、「大山・桝水高原」の観光施設で販売を開始しました。

「大山・桝水高原」は、冬のホワイトシーズンはスキー場、春から秋にかけてのグリーンシーズンは天空リフトがあり、大山（標高1、709m）の中腹900mの展望台からリフトで気軽に米子、境港、島根半島、日本海の雄大な景色を一望できる名所です。

バーガーは、この様な大山の自然環境の中で、豊富な地元食材を手軽にテイクアウトして楽しむことができ、来訪者に対して地域食材の消費拡大による地域振興を図るアイテムの1つであると言えます。

このご当地バーガーをさらに活用し、観光地「大山・桝水高原」への誘客と地域食材の消費拡大を図ることを目的に、平成21年度にとっとりバーガーフェスタ実行委員会を立ち上げ、「ご当地バーガー」が一堂に会する食のイベント「とっとりバーガーフェスタVOL・1」が大山桝水高原で計20店舗の出展により開催されました。

▶大山桝水高原で開催されたバーガーフェスタVOL・1

関西圏・山陽圏へのプロモーション活動や各種情報発信が功を奏し、2日間で県内外から約2万人の来場がありましたが、初回ということもあり、試行錯誤のうえ手作り感満点のイベント運営でしたので、会場地のキャパシティ、交通渋滞、周辺施設との連携など多くの課題が残りました。

平成22年度の「とっとりバーガーフェスタVOL・2」は、規模を拡大して伯耆町「大山・桝水高原」の他に、大山町「大山寺」と江府町「奥大山」を加えた3会場で開催されました。

「大山」のすそ野に位置し隣接するこの3町は、「大山環状道路」と呼ばれる道路で繋がれ、四季を通じて観光客が往来する観光地を形成しています。また、見る位置や時期によって様々な態様を呈する「大山」は、この3町にとって最大の観光資源であり、伯耆町・大山町・江府町の3町で開催することにより、「大山」のPR効果を高め、「とっとりバーガーフェスタ」を通じて県外からの観光客の誘客促進を狙いとしたものであります。

▲「とっとりバーガーフェスタVol.1」ポスター

この「とっとりバーガーフェスタVOL・2」では、県外32・県内28の合計60店舗が出展し、2日間で約6万5千人の来場がありました。

前夜祭として「バーガーサミット」が開催され、出展者間の交流と懇親を図り、出展者間の連携・意見交換・情報発信を行う組織として「全国ご当地バーガー連絡協議会」が立ち上げられました。

バーガーは、パン生地・具材・ソースの組合せによって無限の可能性があり、今後も、全国各地でご当地食材を使った「ご当地バーガー」の開発・商品化が進み、この「全国ご当地バーガー連絡協議会」において情報を共有し、各出展者の技術力向上を図り、「ご当地バーガー」を通じて全国各地において地域振興に繋がることを期待しています。

平成23年度に開催された「とっとりバーガーフェスタVOL・3」では、一般の来場者と特別審査員の投票により「全国バーガーグランプリ」を決定することになり、県内20店舗のバーガーで鳥取県予選会が別日程で開催され、県外28・県内10の合計38店舗が出展し、開催されました。

この年のバーガーフェスタは、9月の台風12号により大山には各所に災害の爪痕が残る中の開催でした。奥大山会場地へのアクセス道路が土砂崩れにより寸断されたため、3会場開催を見送り、出展者38店舗を大山寺1会場に集めてバーガーグランプリが開催され、実行委員会スタッフの苦労のおかげで、大過なく終了しました。

▶「大山バーガー」県産黒毛和牛の分厚いステーキを贅沢に使用

終わりに

過去3年間で、イベントの規模や内容、プロモーション活動・情報発信の手法等により、イベントへの誘客・集客効果が高くなることは実証されましたが、イベントを運営する上で、会場、駐車場、アクセス道路等インフラの規模に見合ったイベント規模が望ましく、このバランスを保つことが重要であることを実感させられました。

また、出展者、来場者、周辺の観光事業者それぞれが満足したイベントとなるためには、課題や改善すべき点は多々あり、まだまだ地域に根付いたものに完成されていないのが現状です。

さらには、イベントが大きくなると、イベントの開催が目的となる嫌いがありますので、あくまでもイベントは集客・誘客と地域PRの手段として、本来の目的「ご当地バーガー」を通じた観光振興と地域食材の消費拡大による地域振興を図って行きたいものです。

平成24年度、「とっとりバーガーフェスタ2012」は、4か所で連携して次の日程で開催しました。是非、皆様にも参加いただき、鳥取と全国のご当地の味をバーガーで楽しんでいただければ幸いです。

伯耆町　商工観光課
（平成24年6月11日付第2803号）

全国ご当地バーガーグランプリ（本選）
日時：平成24年10月7日（日）
8日（月・祝）
10：00～16：00
会場：大山寺　博労座駐車場
（鳥取県大山町）

◇全国ご当地バーガーグランプリ鳥取県予選会
日時：平成24年8月25日（土）
16：00～20：00
会場：とっとり花回廊ゲート前特設会場（鳥取県南部町）

◇大山・桝水高原天空オリエンテーリング
日時：平成24年7月7日（土）
11：00～
会場：大山・桝水高原
（鳥取県伯耆町）

◇奥大山オータム・バーガー・フェスタ
日時：平成24年11月3日（土・祝）
10：00～15：00
会場：奥大山スキー場
（鳥取県江府町）

「とっとりバーガーフェスタ」ホームページ　http://www.tottori-bf.jp/

ヘルスツーリズムの推進と地域振興

～「ひと・森・癒し 安芸太田」森林セラピーのまち～

▼癒しの森でセラピー体験

広島県 安芸太田町（あきおおたちょう）

【安芸太田町の概要】

本町は、広島県の北西部に位置し、国の特別名勝である三段峡、恐羅漢山や深入山をはじめとした美しい山容を誇る西中国山地国定公園を有する、豊かな自然環境に恵まれた小さな町です。

町の南側は広島市に接しており、広島市中心部から直線距離にして約30㎞、中国自動車道・広島自動車道・広島高速4号線（広島西風新都道路）の利用により、自動車の移動で約1時間の圏内にあります。このため、中山間地域にありながらも広島都市圏の観光・レクリエーションエリアとして、都市住民との交流が多い地域です。

【町の経緯と歴史】

平成16年10月1日、私たちの新しい町「安芸太田町」が誕生しました。

安芸太田町の「安芸」は「安芸の国」を意味します。「安芸」の名称は日本書紀（720年）の中で「安藝」の国名が初めて登場し、また風土記（出雲風土記と推察される733年）には「四方の貢物、飽き足れり、因て飽國（あきのくに）と名けらる」と記されているようです。一方、「太田」は、本町を源流域とし、広島市を経て瀬戸内海に注ぐ太田川から名を取っています。

未来戦略会議の立上げ

安芸太田町は、平成16年10月の合併以降、地域活性化に取り組んできましたが、少子高齢化による人口減少は歯止めがかからず、毎年100人以上の人口減少が続き、平成24年4月には、合併時に約9,000人であった人口が7,300人余となり、町の存続の危機ともいえる状況となっています。

そのため、町では、平成22年度に町の未来戦略を構築するため、官民協働による「未来戦略会議」を立ち上げ

ご当地キャラクター

「もりみん」

ました。

具体的には、町内にある地域資源【人材・観光資源・農林水産物】を生かして、「楽しく健康的に生活できる地域社会の構築」と「地域産業の再生・活性化」を目指したプロジェクトを検討・実施していくものとし、町内の個人・関係団体の実務者で組織した3部会（集落再生・町民活力向上部会、観光再生・情報発信力強化部会、産業再生・新産業創生部会）において、数十回にわたる活発な議論が重ねられ、平成23年2月、早急に取り組むべきまちづくり事業について提言を受けました。

その結果、「健康・癒し」をキーワードとした安芸太田町ブランドの確立を目指すこととしました。

安芸太田町森林セラピー基地
グランドオープン
平成25年５月25日（土）～ 26日（日）

安芸太田町森林セラピー
イメージキャラクター：もりみん

観光振興の主要な取組み（ヘルスツーリズムを中心として）

平成23年4月、観光再生・情報発信の体制強化策として町の玄関口、中国自動車道戸河内ＩＣ出入口にある道の駅「来夢とごうち」に、町観光協会と併設して商工観光課を新設するとともに、町観光協会の事務局長を全国公募により採用し、地域ブランドや観光情報・定住情報などの効果的なプロモーションを実施する仕組みづくりや人材の育成に取り組みました。

平成23年7月には、官民協働のヘルスツーリズム推進協議会を発足し、「森林セラピー」、「田舎民泊体験旅行」による誘客と交流の仕組みづくりを新たに開始しました。農林産物の直売と6次産品化を図る新たなビジネスチャンスは、町民に収入と生きがいを提供し、訪れる人も住む人も活き活き元気で生活できる町づくりの実現に繋がります。これにより、町の魅力が向上し、町のファンの増加で入込み観光客・観光消費額が向上する環境と経済の好循環を目指すこととしています。

①森林セラピーの取組み

○広島県初の森林セラピー基地認定

森林セラピーは、森の中に身をおき、歩行や森林内レクリエーションなどの方法によって、心身の健康維持・増進、疾病の予防を目指すもので、いわば「一歩進んだ森林浴」です。

それを支える森林セラピー基地は、森の香りや空気の清浄さ、美しい森の色彩や景観などが人の生理に及ぼす効果について医学実験による検証を終え、お墨付きを得ている癒しの森です。

安芸太田町は平成24年3月24日、広島県初の森林セラピー基地に認定されました。

○森林セラピー®基地グランドオープン

人は、日々の都会のストレス社会に疲れたとき、森の中に身を置くことで、心身ともにリフレッシュし、再び明日を生きる糧を得ることが出来ます。

里山の案内人である「あきおおた里山ガイド」が、４つのセラピーロードと多彩なセラピーメニューを用意して、来訪者の皆様を癒しの森にいざないます。

平成25年5月25日と26日には、待望のグランドオープンを迎えました。

現在、プログラムのさらなる構築や、里山ガイドの研修などを重ね事業全体の魅力アップに取り組んでいます。

○４つのセラピーロードとモニターツアーの開催

「森林セラピーロード」として「恐羅漢山」「深入山」「三段峡」「龍頭峡」の４コースが認定を受けています。

平成24年9月から11月に開催したモニターツアーでは、森林セラピー体験のほか、町の地形や文化・歴史を活かした森林ヨガや陶芸体験、ハーブ石鹸づくりなどの体験メニューを提供してきました。

ツアー終了後に実施したアンケート結果を検証し、プログラムをブラッシュアップしていきます。

○あきおおた里山ガイドの育成

里山の案内人である「あきおおた里山ガイド」は現在第1期、第2期が終了し46名が修了しています。今後里山ガイド１００名の育成を目指しています。

○イメージ戦略

森林セラピーをアピールするためプロモーションビデオを作成し、ホームページで紹介しています。併せて、キャッチコピーとして「ひと・

森・癒し　安芸太田」を決定し、「森の妖精」といわれる「ヤマネ」をモチーフにしたイメージキャラクター「もりみん」を紹介しています。

さらに、シンガーソングライターの丸本莉子さんを町のイメージシンガーに認定し、同じくイメージソングに認定した彼女の歌う「ココロ予報」は、町の情景を歌った「空」とカップリングされ、平成24年12月5日にCDミニアルバムがリリースされました。

②体験型観光への取組み

○修学旅行（教育旅行）誘致

平成24年度広島県が民泊受入れに関するガイドラインを整備したことから、準備をスタートさせ平成24年2月1日、官民合同の安芸太田町田舎体験推進協議会を立ち上げ、本格的に民泊引受け家庭募集及び教育旅行誘致活動を開始しました。

当町民泊事業の最大の特徴は、スキームづくりこそ町において主導しましたが、運営は観光協会をはじめとする「町民」サイドが旧町村の枠を越えて連携し、主体的に取り組んでいる点にあります。と言うのも、民泊受入れを最終目的とするのではなく、民泊事業を活用して高齢者の活性化や地域の再生に繋げていこうという共通目的が、町と民泊に関わる町民の間で共有されているからです。

その結果、民泊引受け家庭で組成する民泊部会では、毎回非常に熱心な話し合いがされ、既に2度の視察、2度の試験受入れ、7度の研修会を実施しています。

一方、教育旅行誘致も順調で平成25年に2校、本格受け入れ元年となる平成26年度には5校の来町が決定しています。

小規模自治体単体としては極めて珍しいことですが、「安芸太田町人情田舎体験」として町民手づくりの民泊プロモーションビデオも完成させています。

都市部の学生の教育に資し、引受け家庭や地域の活性化を促進し、町への経済波及効果が非常に大きい民泊事業は、中山間地の過疎高齢社会においては、数少ない三方良し的事業であると考え、強力に推進しています。

▲教育旅行で好評のラフティング体験

③欧米富裕層の観光誘致へ

観光施策の効率化を考えた場合、教育旅行素材や人材をそのまま活用できる点においてメリットがあると判断し、町観光協会が中心となり欧米富裕層をターゲットとした観光誘致を開始しました。

特に、周辺市町が中国・韓国に注力していることから、広域的な補完戦略としても欧米系かつ富裕層に向けた取組みが有効であると考えています。

手つかずの豊かな自然や素朴な文化に加え、「人情味溢れる」本町町民の心ばえを前面に押し出した「交流型体験」視点こそ、他市町との差別化が出来ます。加えて、欧米系訪問者数が非常に多い広島市と隣接している点においても有利な状況にあります。

平成24年、町単独で1回、広島県との連携で3回、欧米系旅行会社やメディア招へいを実施し、特に、同年9月実施した神楽ツアーは、単なる見学型では無く、地元神楽団との「交流」、そして「体験」型にした結果、好評を博しました。

また、平成25年1月には、西日本最南端ともいえる豪雪地帯である本町のマイナスイメージを逆手に取った雪かきイベント等による欧米人誘致もおこないました。このように外国人誘致の組織を立上げ、一層の取組み強化を図っていく予定です。

元気なまちづくりへの挑戦

◆町民との協働のまちづくり

本町をはじめとする中山間地域においては、過疎・高齢化が猛スピードで進み、小規模集落においては自治機能の維持さえ困難となり、すでに一部集落では事実上の集落崩壊の状況を迎えつつあります。こうした地域の生き残りは、まさに町の生き残りでもあるとの危機感から、本町においては、平成23年2月の未来戦略会議の提言を受け、集落再生への取組みに着手しました。

具体的には、合併前の旧町村ごとに専従の地域担当職員を2名ずつ配置し、48自治振興会の相談相手となると

ともに、地域住民自らその地域の5年後、10年後を見据えた地域づくり計画：地域マスタープランの策定を呼びかけたところ、平成23年度、24年度で3分の1の地域から手が上がり、町と地域の協働による取組みの結果、現在6地域で策定が完了し、残る地域でも熱心な話し合いが重ねられています。

策定した地域マスタープランの実施計画支援のため、『地域マスタープラン推進事業補助金・地域マスタープラントライアル事業補助金制度』を創設して財政支援を行うとともに、平成24年度からは地域おこし協力隊員4人を地域に派遣して、地域活性化のための人的支援を図るとともに、周辺地域の自治機能維持のための『集落支援員派遣事業』にも取り組むこととし、併せて地域マスタープラン策定・実施計画支援のために、担当課である地域づくり課職員以外の一般行政職員全員による集落支援活動「地域サポーター制度」を平成25年度からスタートさせました。

また、協働のまちづくりは、町民と行政が、その理念や方向性を共有してはじめて実りあるものとなることから、平成24年度1年をかけて町職員が作成した「協働のまちづくり基本方針たたき台」をベースに、平成25年度は学識経験者や自治組織の代表者、住民代表等13人からなる協働のまちづくり基本方針策定委員会で議論が重ねられ、このほど『～みんなで〝つろうて（一緒に）やる〟まちづくり～』を副題とした、安芸太田町独自の「協働のまちづくり基本方針」が完成しました。

◆協働による安芸太田町がめざす将来像について

自ら進んで地域の課題や問題を解決していく意欲や能力が育つことで、協働の担い手である住民、自治振興会、各種団体、事業者、行政のそれぞれの特性や能力を活かした取組みを行うことで、みんなが活き活きと安心して暮らせる安芸太田町を目指しています。

①ウルトラマラソンを通じた元気な地域づくり

毎年9月中旬に開催される、距離88㎞、高低差854ｍを制限時間13時間で走り切る「安芸太田しわいマラソン」は、ゴール直前に、アーチ式としては国内で2番目の高さ156ｍを誇る温井ダムの481（しわい）段を駆け上がるという過酷なウルトラマラソンで、平成24年に3回目を迎えました。

「しわい」とは、この地方の方言で「過酷、しんどい」などを意味します。

▲夜も空け切らぬうちから過酷なレースのスタート

人口7、300人余りの小さなこの町で開催されるこの大会には、今年も南は沖縄から北は北海道まで全国各地から400人余り、更には韓国からの参加もあり、国際色も出てきました。

特徴的なのは、大会を運営する実行委員会のメンバーのほとんどが、個人のボランティアということ。町も大会当日は大会車両として公用車と運転する職員を派遣しますが、関与もそこまでで裏方に徹しています。それを補完しているのが、5㎞ごとに設置されたエイドステーション（無料休憩所）の運営や選手誘導員に携わるコース沿線・沿線外の自治振興会や町内事業所、消防団員の皆さんです。

コース沿線から寄せられる選手の名前を呼んでの声援やエイドステーションでの地域のおもてなしは、選手の皆さんに大きな感動と勇気を与え、すでに多くの固定ファンをつかみつつあり、地域の皆さんも毎年参加する選手との交流を楽しみに、開催日を心待ちするなど、このウルトラ大会が元気なまちづくりにつながっています。

▲雄大な自然のもとで気持ち良くウォーキング

インターネットのマラソン専門サイトの評価では、平成24年9月に全国で開催された数多いマラソン大会（ハーフ・フル・ウルトラマラソン）の中で、参加選手による総合評

価第1位を獲得しました。全国に誇るべき大会になりつつあることを大変うれしく思います。

②日本一のウォーキング大会を目指して！

本町では、平成14年から、《生涯現役、死ぬときゃぽっくり、歩いて棺桶まで》をスローガンにウォーキングを普及しています。

健診結果でメタボリックシンドローム「内臓脂肪型肥満」に該当する町民を対象に有酸素運動（ウォーキング）を指導し、運動習慣者になってもらい「歩いて棺桶まで」を目指しています。

また長期総合計画における健康促進プロジェクトでは、全国規模のウォーキング大会の開催を掲げ、平成19年度から毎年開催しています。

▲話題を集めているAKOポスター

第6回目を迎えた平成24年の大会は、町内16の各種団体で結成された実行委員会方式により、10月6日（土）、10月7日（日）の2日間開催しました。

メインとなる2日目の10月7日は、西中国山地国定公園の草原状の美しい山容を誇る深入山周辺に、30㎞・20㎞・10㎞・ミニトレッキングコースを設定し、平成24年は新たに高齢の参加者や小さなこどもさんを連れた家族のための2㎞コースを設けました。

当初参加者は1、000人を見込んでいましたが、他のイベントも重なったこともあり、最終的には846人の参加となりました。

参加者の感想は、「自然の景色を見ておいしい空気を吸えた」「スタッフの声かけに元気づけられた」「梅飴（商工会女性部）、漬物（女性会）、ぜんざい（ヘルスメイト）のおもてなしが素晴らしい」などの感想がたくさん聞かれました。

実行委員会の反省会では『団体が自ら関わり汗を流すことは、ともにウォーキング大会を支えている実感がある。これからも手づくりの大会を盛り上げていこう』など多くの意見が出されました。

これからも、心を込めた手づくりの大会を合言葉に、日本一のウォーキング大会を目指し、たゆまぬ努力を重ねていきたいと思います。

③町女性職員らによる手づくりのまちおこし　～乙女？たちの挑戦～

平成24年10月下旬、町の活性化を考える町女性職員6人による特命チーム「安芸太田町魅力UP↑女性会議」を立ち上げたところ、わずかその10日後には、小さな町でも、元気よく、楽しく、町を訪れる方々に「また来てみたい」と思っていただけるような『心からのおもてなし』に取り組んでみようと、町女性職員全員をメンバーとした『安芸太田町AKO』（AKO=あがぁ～、こがぁ～言う乙女たち（色々わいわい意見を出しながら町の活性化に取り組もうという趣旨）が結成されました。

このAKOでは、町を元気にする活動第一弾として、広島県観光プロモーション「おしい!! 広島県」秋のキャンペーンとして11月末まで展開された県庁男性職員による『全力歓迎課！』の理念と精神に倣い、広島県の公認を得て町内10か所で地元町民の皆さんと共演する「おしい！ のぉ～。安芸太田町」観光PR動画とポスターを、町観光協会や町内若手事業者等と協力して手づくりで作成しました。ポスターは、町内の各公共施設に掲示してPRしているほか、PR動画についてはインターネット上にアップし、ホームページからも見られるようにしたところ、各メディアからも大きな注目を浴びテレビや新聞等で大きく取り上げられました。

町民の皆さんからも、楽しそうな取組みで元気があっていいと評価いただいています。AKOでは、結成以来、町内で開催されたイベントなどにボランティアで出演し、町のPRとおもてなしに取り組んでくれています。

このように、今本町は、新たなまちづくり、地域おこしの取組みが産声を上げつつあります。こうした取組みを活かしながら、今後ますます厳しい状況が予想される中山間地域の小さな町にあっても、心の温まるような元気を発信し続けたいと思います。

安芸太田町長　小坂　眞治

（平成25年1月14日付第2825号）

産業体験型観光によるまちづくり

～来（き）なっせ　やきものと自然あふれる波佐見（はさみ）へ～

▼美しい鬼木棚田の風景

長崎県　波佐見町（はさみちょう）

はじめに

長崎県波佐見町（はさみちょう）は、長崎県の中央北部に位置し、北と東を佐賀県に接する町です。東西10・5㎞、南北7㎞、周囲33㎞で総面積55・97㎢（山林約63％）です。人口15、237人、世帯数5、042世帯（H24・11月末）、高齢化率約26％で、長崎県で唯一海に面していない町です。

波佐見町は、400年の伝統をもつ全国屈指の「やきものの町」として栄えてまいりました。全国の一般家庭で使われている日用食器の約13％は波佐見町で生産されています。

農業の近代化にも力をいれ、水田面積650haのうち約83％は区画整理済みで大型農機による作業とライスセンターを結んだ米麦大豆一貫作業体制が確立されています。

これによって生じる農家の余剰労働力は、地場産業である陶磁器関連産業への就労と結びつき、農工一体となって発展を続けてまいりました。

また、平成22年には長崎キャノン㈱が進出し400年の歴史を誇る陶磁器産業、農業や温泉などとデジタルテクノが融合した共生のまちづくりを目指しています。

多彩なイベント

★年間とぎれることがない各地域イベント

この陶磁器生産の町の最大イベントはゴールデンウィーク期間中に行われる「波佐見陶器まつり」です。約130社の窯元と商社が軒を並べ、多彩なイベントを開催し、毎年来場者が増え続け、期間中30万人を超す人出でにぎわいを見せます。今年で57回を数え、波佐見町が誇る看板イベントとして定着しています。

一昔前までは町外から集客する観光的なイベントとしては、この「陶器まつり」だけでしたが、20数年前から状況が変わってきました。

歴史とロマンが詰まった
「コンプラ瓶」

そのきっかけは、山あいにあり、陶郷の里として知られる中尾山にある窯元の若手メンバーの情熱でした。4月に開催されている「桜陶祭」は、当初は地域内の窯元の交流の場として始められましたが、年々趣向が凝らされ、現在では各窯元の工場を展示場として開放するなど、町内外のお客様と直接交流がもてるイベントとなり、今では2日間で約2万人のお客様が足を運ぶ大イベントとなりました。

桜陶祭で一番の名物となっているのが、各窯元のオリジナルの陶箱弁当で、毎年大人気です。また、10月には「秋陶めぐり」を開催し、窯元を一般公開するなど、やきものの販売はもとより、作り手と買い手の心の交流が持たれています。

このように地域から自主的に沸きあがってくるイベントが、町内各地で生まれてきました。

その一つである「鬼木棚田まつり」は、平成11年に棚田100選に選ばれたことをきっかけに始まり、毎年9月23日に開催され、こちらも年々趣向が凝らされ、現在では、地元鬼木地区全戸から出品されるその年の世情を反映したユニークな案山子たちが立ち並び、約1ヶ月間で、2万人近くの観光客が訪れる大イベントとなっています。

▶波佐見陶器まつりの様子

▶ユニークなかかしの展示

◀多くのやきものファンで賑わう「桜陶祭」の様子

◀人気の「陶箱弁当」

また、駅のない波佐見町で毎年人気ランキングの上位にランクされるJRウォーキングが開催されますが、そのお目当ても鬼木のユニークな案山子たちです。毎年、鬼木地区には、期間中町内外からユニークな案山子を一目見ようと、多くの観光客が訪れています。

このように、桜陶祭や鬼木の棚田まつりは、県内はもとより、九州各地の方から楽しみにされているイベントに育ちました。

これらの地区の成功をきっかけに、その他の地区でも地域の特色を活かした「川内ほたる祭り」、「ザー酒塾」「村木畑ノ原まつり」、「笑楽井石祭り」、「皿山器替えまつり」、「峠の里まつり」などのイベントが、地区の有志によって立ち上げられています。このような取組みが波佐見町の元気の源だと思います。

「来なっせ100万人」

※「来なっせ」とは波佐見弁であり、「どうぞおいでください」の意味です。

陶磁器産業の落ち込みで町内の産業に活気がない中にあって、「これらの動きを町全域に広げることができないか」、「町外からのたくさんの人に来

てもらって、町内を元気にできないか」とこのような考えが起きてきました。このころ、これまで観光産業とはあまり縁がなかった波佐見町において、陶郷中尾山や鬼木棚田、温泉、史跡等、もともと地元にある資源を活用して、観光交流人口を増やし地域が元気になるために「来なっせ100万人」というスローガンを掲げ観光に力を入れるようにしました。これらを受けてNPOグリーンクラフトツーリズム研究会などの団体や町、観光協会等一体となって、グリーンツーリズムとクラフトツーリズムを組み合わせたツーリズム事業が始まりました。

▲「笑楽井石」手作りピザ窯を使ってのピザ作り

体験型観光花ざかり

このようにして始まった波佐見町のツーリズム事業は、試行錯誤しながら、現在では年間イベント「つんの～で波佐見　陶農の里　とうのう」として、やきもの体験、農業体験、また2つを組み合わせた陶農体験メニューを開発し、観光客の受入を行うまでに成長しました。

やきもの体験では、「ロクロ・絵付け体験」などの本格的なものから、「波佐見焼ストラップつくり体験」「やきもの貼り絵付け体験」など、お手軽に楽しめる体験まで色々な体験メニューが揃っています。

▲やきものと農業を組み合わせた陶農体験「ザ！酒塾」

農業体験では「米作り体験」「梅漬け体験」「椎茸収穫体験」など、波佐見の豊かな自然を思う存分満喫できます。

また、やきものの煙突レンガのリユースややきものの窯が変身したピザ窯で、親子や友人と一緒にピザ焼きができる「石窯ピザ焼体験」など「おいしい体験」も人気メニューです。

その他にも、波佐見町ならではの体験が、やきものと農業を組み合わせた陶農体験です。その中で1番人気は、前述しました「ザ！酒塾」です。地域のイベントから生まれた体験メニューで、酒米の田植え・稲刈り体験をし、その米でできた酒を自分の手で作ったオリジナルの器でいただくという、なんとも贅沢な体験です！　1回目が田植えと手びねりによる酒器づくり、2回目が稲刈りと酒器の絵付け、3回目がラベルづくりと新酒試飲会となります。1回申し込むと波佐見町に3回来て頂けるという仕組みになっています。

この他、蕎麦の栽培から蕎麦打ちまでの体験に、蕎麦ちょこ作りを加えた「ザ・そば塾」、麦大豆の栽培から味噌づくりまでの体験に、味噌甕（かめ）づくりを加えた「みそづくり塾」など、波佐見ならではの窯業と農業を組み合せた「陶農体験」メニューを多くのお客様が満喫されています。

▲やきものの焼成窯を再利用したピザ焼体験

日本再発見塾

ツーリズム事業が盛り上り始めた平成22年11月には、東京財団の後援を頂き、「第六回日本再発見塾in長崎県波佐見町」を開催することができました。

全国から120名の参加があり、「手づくりしてみらんね　幸せに手の届くばい」と題して、「語る・探す・食す」をコンセプトに、やきものと農業の町・波佐見町でいろんな見学、体験を通して、外から見た波佐見町の他のまちにはない魅力的なところを発表していただき、地元の人が普段は感じない波佐見の良さをあらためて再発見

▲日本再発見塾

するという、大変有意義で意味のある塾を開催することができました。その後も、地元主催で「波佐見再発見塾」が毎年開催され地域を再発見し、地域活性化に一役買っています。

待望の「はさみ温泉」復活！

地域の盛り上がりは、ついに温泉も復活させました。以前あった温泉センターが閉鎖され波佐見町から良質な温泉が途絶えていました。

そのような中、温泉を何とか復活させようと町が新しい泉源を掘削し、地元有志の皆さんが立ち上がり、はさみ温泉「湯治楼」（ゆうじろう）が波佐見の癒しスポットとして平成22年4月にオープンしました。とろみがあり、美肌にいいと評判のお湯で、3つの内風呂は全て源泉掛け流しです。さらに、このお湯に炭酸を封じ込め、全国的にも珍しい高濃度炭酸泉もあります。

緑の山々に囲まれて、川のせせらぎを聞きながら、ゆったりと過ごすひとときをアットホームなおもてなしで体感でき、地元はもちろん、県内外からもたくさんのお客様が心と体の癒しを求めて来て頂いています。

併設の「陶農レストラン清旬の郷」では、地元の食材にこだわり、旬のおいしい素材を使った身体にやさしい料理が波佐見焼の器でいただけるとあって、温泉同様人気のスポットとなっています。

これからのまちづくり

このように地域の活力が産んだイベントも、最初は数名の参加からのスタートでした。

それでも地域の人たちは口を揃えて言います。「最初は数名でもいいんじゃないか」、「その最初の第一歩を踏み出すことが大切なんだ」、「踏み出さないことには何も始まらない」このような気持ちが地域を動かし、町民も巻き込み、イベントが定着化し、来訪者にも喜んでもらえるようになると思います。

そこまで来ると地域の自信となり、最終的には地元皆さんが元気になってもらえると思っています。

これからも、地区の特徴を取り入れたイベントを企画し、地区の方と一緒になって波佐見町を元気にし、PRできれば良いと思います。目標は、町内22自治会で、それぞれの地域の特色を取り入れたイベントを年間1回行ってもらい地域活力を観光に取り入れていければ面白いと思います。

地域が元気で、訪れるお客様と地域が交流を持ち、お互いが体験観光等で楽しめる観光と産業がうまく融合できる、訪れる楽しみがあるまちづくりを進めていきたいと考えています。

波佐見町長　一瀬　政太

（平成25年1月7日付第2824号）

▶農家レストラン清旬の郷

▶美肌の湯「湯治楼（ゆうじろう）」

「真冬のたなばた」及び「光り輝くまちづくり」事業

国富町21世紀まちづくりフォーラム
まちづくりの希望の光として輝く冬のイルミネーションの取り組み

▼毎年10万球のイルミネーションを点灯する「真冬のたなばた」

宮崎県　国富町（くにとみちょう）

国富町の概要

宮崎県のほぼ中央で、宮崎市の北西に隣接する国富町は、豊かな緑と全国有数のきれいな水質である一級河川・本庄川などの清らかな水に恵まれた田園都市です。東西22㎞、南北18・8㎞で面積は130・71㎢、そのうち北西部の約3割が国有林になっています。北西から南東に向かって本庄、飯盛、高田原、六野原などの台地が展開し、その中の本庄台地の上に町の中心市街地が形成されています。

本町は昭和31年9月に本庄町と八代村が合併し、「国富町」として発足、次いで昭和32年3月に木脇村と合併し、当時人口2万4千人を超える県下最大の町として誕生しました。しかし、その人口も昭和45年には1万9千人まで減少し、その後持ち直して現在は2万900人（平成26年現在）となっています。現在も全国的な傾向と同じく、人口微減が続いています。出生率の減少、若い世代の町外への流出を食い止めるためにも、元気で魅力的なまちづくりを継続していくことが必要だといえます。

21世紀まちづくりフォーラムの結成

「21世紀まちづくりフォーラム」（以下「フォーラム」）は、そういう元気で魅力的なまちづくりの団体として、平成5年8月11日に結成されました。まちづくりをテーマに、職場も年齢も異なる町民が参加し、誇りを持てる夢のあるまちづくりを目指そうと町内の各種イベント等へ参加し、さらに研究することにより、子どもから高齢者まで老若男女を問わず参加し楽しめる「元気のあるまちづくり」「夢のあるまちづくり」「美しいまちづくり」を目

ご当地キャラクター

「しらたまちゃん」と「しらたマン」

指しています。また、先進地視察等により、メンバーの自己研鑽・地域交流にも努めてきました。そんな活動の中でも中心となるのが、フォーラムのメンバーが主体となって開催している「真冬のたなばた」事業。役場庁舎周辺に11月下旬から1月中旬まで、毎年約10万球のイルミネーションを設置し、12月にはイベントも開催する手作りの事業です。さらに、この事業と連動するかたちで平成12年から町の補助事業として町商工会による「光り輝くまちづくり」事業（宮崎市―国富町―綾町をつなぐ県道26号線宮崎須木線沿道街路樹にイルミネーションを約20万球設置）が開始されました。この二つの事業の相乗効果により、イルミネーションが輝く街の光景は、すっかり本町の冬の風物詩となっています。

▶イベントでは花火、ダンスショー、太鼓演奏などが行われる。

真冬のたなばた実行委員会

真冬のたなばた実行委員会は、フォーラムが主体となって、町青年団、町婦人会、町商工会青年部、町内の高校生ボランティア、その他のまちづくり団体など、多彩なメンバーで構成され、例年イルミネーション設置とその管理・撤去まで、イベント運営のすべての作業を業者に委託せず、自ら行ってきました。クリスマス時期には、太鼓やダンスチームの出演によるステージイベントと真冬の花火大会を開催し、町内の家庭・企業を対象にしたイルミネーションコンテストの表彰も行います。見る人の心を暖かな光で癒すことをコンセプトとし、派手ではないが心に残るレイアウトを意識して設営しています。また、当日のフィナーレに行われる花火大会では、花火とイルミネーションの光の共演を楽しめ、イベントのクライマックスとして一見の価値があります。

▶イベント開催に向けて作業を行う実行委員会メンバー。

真冬に心を温める光景

このイルミネーション設営とイベント運営は様々な団体が共同で作業することにより、お互いの協力・連携を高めることに役立っています。同じ町内のまちづくり団体同士が協力し合い、新たなイベントを生み出す効果もあり、イルミネーションコンテストは町内全域にイルミネーションを波及させてきました。また、イルミネーションイベントを町の風物詩として定着させた効果も高く、毎年、メディア等からの問い合わせが多くあり、遠くは首都圏や近畿圏などからも問い合わせ・写真提

供の依頼があります。事業の効果として、数値的にはっきりとしたものはありませんが、来場するカップルや友人のグループ、親や祖父母に連れられて「光のトンネル」ではしゃぐ子供達の様子には心温まるものがあり、イルミネーションの光のみならず、来場者を含めた光景そのものが訪れた人たちの心をなごませてくれます。

▶イルミネーションの設置を行う実行委員会メンバー。

希望の光が輝く元気なまちへ

このフォーラム活動も、近年は町の人口減少や事業の長期継続によって参加者が固定化し、その発展性に陰りも見え始め、参加人数の確保に苦慮するという悩みを抱えています。そのため、さまざまなマンネリ防止策を検討していかなければならないのですが、今後そういった新たな取組みを継続して実施していけるかということも課題になっています。

平成22年は宮崎県内の口蹄疫被害への配慮による中止も懸念されましたが、鎮魂の意味も込めて例年通り開催しました。また、平成23年は東日本大震災による節電の影響により期間・時間を短縮して開催せざるをえませんでした。再生可能エネルギーによって得られた電力の環境付加価値分を証書化した「グリーン電力証書」の活用や太陽光発電の導入なども検討しましたが、まちづくり団体の手作りイベントのため予算的な限界や、また蓄電の面から困難な点もあり、今回の導入は見送りました。しかし、環境保護の観点から、長寿命で省電力であり、また光に紫外線や赤外線をほとんど含まないという環境にやさしいLED球の導入などに、今後も引き続き積極的に取り組んでいきます。

また、平成24年（2012年）には古事記が編纂されてから1300年目を迎え、この年から日本書紀の編纂1300年目である2020年までを「記紀編纂1300年」として宮崎県全体で観光の活性化事業に取り組んでいます。そのことにリンクして、日本神話にちなんだ縁結び神社やパワースポットを巡る「宮崎恋旅プロジェクト」も進行していますが、ロマンティックな光のスポットである国富町の冬のイルミネーションにも神話のファンタジーを絡めていくことができれば、とアイディアはふくらんでいきます。

いまだにすっきりとした明るい未来が見えづらい時代ではありますが、わたしたち一人一人の心の中を暖かく照らすイルミネーションで日頃の小さいながらも確かな幸せを改めて感じ、それが光り輝くまちづくりへの希望の灯りとなっていくことを願ってやみません。

国富町　企画政策課

（平成24年10月1日付第2815号）